ごめんね、純子

ふるさと　日本を離れて

わたしは昭和十六年一月に、軍人だった主人といっしょにソ連との国境の虎頭[15]という所に行きました。

官舎は部隊長、中隊長と階級別にそれぞれ三列ずつ並んでいました。鉄筋コンクリートの二階建てで、ベランダが広く、部屋は三室、それにトイレ、浴室があり、トイレにまでスチームが通っていて近代的でぜいたくな家でした。ただ、ひとつ困ったことは、燃料が石炭なので火かげんが思うようにいかなくて、黒こげのご飯

ばかり作ってしまいました。

わたしの楽しみは、主人といっしょに虎頭の市場に行って店を見て回ったり、飯店で食事をすることでした。主人のいない日は、ひとりで野原に出かけてヨモギやアカザなどの食べられそうな野草をつんできておひたしにして食べたりして、満州の原野を楽しんでいました。

でもそうした平和な生活はいつまでも続きませんでした。

昭和十七年ごろになると戦争はますます激しくなり、家族は内地(日本)に帰されました。しかし昭和十八年、再び虎頭にもどることになりました。

そのころ内地では、すべての日用品や衣料、食料が配給制となり、「欲しがりません　勝つまでは」とがまんの毎日でした。しかし、まだ満州は配給制ではなく、何でも自由に買えました。

南方での日本軍は、じりじりとアメリカ軍に追いつめられ、全員※玉砕という悲

※玉砕……死を覚悟して力の限り敵に当たる

しい知らせがとどくようになりました。

そんな中で、わたしは昭和二十年七月十五日、牡丹江[16]の満鉄※病院で女の子を産みました。つきそいをしてくれたのは、朝鮮のかたでとても優しい人でした。主人も部隊の行き帰りに立ち寄ってくれて、赤ん坊をだいてくれました。いとしそうにだく主人を見てわたしはとっても幸せでした。

赤ん坊の名前は、「純子」とつけました。

終戦そして別れ

退院してまもなくの八月九日。ソ連軍はお互いに戦争をしないという約束を破って、ものすごい勢いで満州国内にせめてきました。

市街は、ソ連軍の飛行機に爆撃されて戦場になりました。わたしはおむつや洗濯物を外にほすこともできず、おし入れに純子を寝かせて、ふるえながらいつでも逃

※満鉄……南満州鉄道

げだせるように荷物の整理を始めました。
主人の部隊は現地に残るものと、戦場に行くものとに別れ、主人は残るほうになりました。
わたしたち家族は山奥に逃げることになりました。まだ生まれてまもない純子を胸のところでくくりつけて、リュックサックにおむつと着がえを入れて背負い、出発しました。主人との別れは悲しくて、なみだが流れて止まりませんでした。
「どうか最後まで生きぬいてください」
と、泣きながらいいました。

わたしたちは用意されたトラックに乗り、八月十一日の夜九時に、やみの中を出発しました。
トラックの上では、赤ちゃんや小さな子供たちの泣きさけぶ声と、母親たちのしかる声が重なりあっていました。不安とおそろしさをのせて、トラックはやみの中

をただひたすら走りつづけました。夜がしらじらと明けるころ、⑰東京城に着き、わたしは早速、純子のおむつを洗いました。

急いでおにぎりを食べてすぐに出発です。

出発してしばらくすると、雨が降り始め、またたくまにどしゃ降りになり、道がぬかるんでとうとうトラックがストップしてしまいました。わたしたちはトラックからおりて体も荷物もずぶぬれになって歩きつづけました。

歩いているうちに雨が上がると、今度は太陽がかんかんに照りつけて、親も子も赤黒く日に焼けてきました。

川を見つけると一目散に走って水を飲み、タオルをぬらして頭にかぶりまた歩き続けました。子供たちがおなかをすかせて泣いたり、苦しんで泣きだしたりすると「泣くな、※馬賊がくるぞ」としかられ、それはそれは、かわいそうでした。

夜になると、軍の倉庫のようなところで、ごちゃごちゃと重なりあって寝ました。

※馬賊……馬に乗った盗賊たち

数日かかって歩き続け、やっと鏡泊湖[18]の山奥に着いたのは八月十五日でした。

部隊長や幹部の人たちが、「よく無事に着いてくれた。これから内地に帰れる日までみんなでいっしょにがんばりましょう」

と、優しい言葉をかけてくださいました。

その後、牡丹江に残っていた主人も無事に帰ってきて、親子三人いっしょにくらすことができて、本当にうれしいひとときでした。

生まれてやっと一か月たった純子は、この悪い環境の中でも病気ひとつせずに、すくすくと育ってくれました。

八月十七日の朝のことでした。全員集合ということで何事かとみんなで集まりました。そこで「八月十五日に、天皇陛下より戦争が終わったというラジオの放送があり、日本が無条件降伏した」と知らされました。今まで張りつめていたものが、音を立ててくずれるような気持ちになり、立っていることもできずその場に座りこんでしまいました。

おそろしさにふるえて

戦争に負けたのだから、このまま山奥の陣地にいることは危険です。みんなですぐ山をおりることになりました。兵隊さんも家族もいっしょになって歩いていくのです。長い長い行列が続きました。途中、ソ連兵の部隊と出会い、ソ連兵の赤ら顔を見ておそろしさにふるえが止まりませんでした。

通った道のそばに、ソ連軍によって殺された兵隊さんや負傷した兵隊さん、病気やけがで動けない兵隊さん、何の手当もされず死にそうになっているむすめさんがいました。でもわたしたちはどうすることもできません。ただお念仏をとなえながら通り過ぎました。

九月二日。部隊は解散。軍刀や、銃や、双眼鏡、カメラ等、全部ソ連兵に取り上げられました。戦わないで敗戦、兵隊さんの気持ちを思うとどんなにくやしいことかと胸がいっぱいになりました。

部隊といっしょに日本に帰れると思っていたら、家族だけがトラックに乗せられました。

せっかく主人といっしょに日本に帰れると喜んでいたのに、くやしさに心がきりきりと痛みます。

トラックはわたしたちの心細い心をのせて収容所のような所に止まりました。その場所は開拓団の人たちの施設で、土塀に囲まれた中に千人以上の人たちが入れられていました。みんなみすぼらしい服を着て、ぼんやりと元気のない顔をしていました。

わたしたちは前に家畜が入っていた小屋を与えられました。かれ草を集めたりして何とか寝床を作り、身動きできないようなせまい所での生活が始まりました。

主人たちはソ連の捕虜となって、北に連れていかれたといううわさが流れました。主人の無事をひたすら祈りました。

夜が明けるのを待って、わたしたちは食べ物を探しに出かけます。ひざから下を

びしょびしょにぬらしながら野菜や野草を探しました。畑に残っていた大根を見つけて生のまま食べました。小屋にはソ連兵が毎日のようにやってきて、わたしたちの荷物を引っかきまわしては目ぼしい物を探して取っていきます。

歯みがき粉を見つけて、なめたり顔にぬったりしていました。歯みがき粉も知らないとはあきれました。

二、三日して食糧が配給になりました。配られたのは、皮つきの高粱※でした。弱った体に消化が悪く、みんな下痢になやまされました。お風呂どころか顔を洗うことも口をすすぐこともできず弱りきっていました。ソ連兵によるむごたらしい仕打ちはますますひどくなり、若い女の人をなぐったりけったりしてむりやりどこかに連れていってしまいます。女の人の泣きさけぶ声を聞きながらも、わたしたちは助けることもできないのです。血が出るようなくやしさ悲しさです。

※土塀……土で作った塀
※捕虜……27ページの注を参照
※高粱……中国産のモロコシ

わたしはそんな中でも純子のものだけはきれいな水で洗ってやりたいと思い、朝早く起きて川に走っていきました。純子はこんなつらい環境の中でも元気に育っていきました。

ときどき、まゆをしかめながら、一生懸命にわたしに語りかけるあどけないしぐさが、何ともかわいくてだきしめてしまいました。

「純子が元気なうちに、内地（日本）に帰りたい」

そればかり思って東の方に向かって、泣きながら拝んでいました。

人の優しさにふれて

九月に入ると急に寒さがまし、このままいたら凍死してしまうとみんなで相談して、また東京城に向かって移動が始まりました。焼け残った荒れ果てた官舎に入り、寒くて体を寄せ合って寝ました。

これからの寒さにそなえて、焼け残っている建物などから燃料になる物を見つ

けて集めました。

十月十七日のことです。雨がざあざあ降る中を、近所の官舎をこわして燃料にする木を集めていたら、日本の兵隊さんたちが大ぜい通るといううわさを聞いて、道路に走っていきました。久しぶりに見る兵隊さんの姿になみだがあふれて、手をふるだけで声をかけることもできませんでした。

わたしたちのみすぼらしい姿を見て、男泣きしている兵隊さんもいました。手袋、くつ下、タオル、石けん、途中で取ってきたのでしょうか、野菜なども投げてよこしてくれました。

馬に乗ったソ連兵が、兵隊さんとわたしたちが話をしてはだめだとばかりに、ぼうをふりまわしておどしました。

わたしたちはそれでも次の日も次の日も道路に出て、次から次へと歩いてくる兵隊さんを見送りました。わざわざ背中の純子の顔をのぞきこんでは「かわいそうに」と泣いている兵隊さんもいました。兵隊さんたちの優しさと温かさに胸がいっ

ぱいになり思いっきり泣きました。

思いがけず高森さん、原田さんも偶然にご主人と再会できました。無事を喜び合っている姿にもらい泣きしながら、「純子のお父さんはどこでどうしているのかしらね」と話しかけていました。その言葉は、次第に泣き声になってしまいました。

わたしの純子

収容所では毎日、作業が割り当てられました。わたしは、純子をおいて落穂拾いの作業に出なくてはなりません。

出かけるとき、「純子、泣かないでおとなしく留守番してね」とだきしめました。

帰ってきておっぱいを飲ませるときのうれしさは何にもたとえられないものです。純子は、つぶらなひとみでわたしをじっと見つめて話しかけてきます。何も知らずただひたすらすべてを母親にあずけて信頼しきっている純子。いとおしくて胸がいっぱいになります。

そんな親子を自然はようしゃなく苦しめます。ますます寒さがきびしくなり、木枯らしがふくうえに雪まで降り始め、絶望の日々が続きました。おむつを洗う手もかじかんでしぼることもできません。でも、純子のためにがんばりました。純子だけがわたしの生きるすべてでした。

ある朝のこと、純子の様子がおかしいのに気づきました。熱っぽいようで動きも元気がなく、心配になって朝鮮人の病院に連れていったところ、軽い消化不良だといわれ、注射を打ち、薬をもらって帰りました。その日も、わたしは炊事当番です。病気の純子をおいて出かけなくてはなりません。

仕事をしていても心配で、ときどき部屋にもどってみると、わたしの姿を見て目でわたしを追いかけて泣きました。もう仕事をしないで純子のそばにいたい、純子をだきしめたいと思いましたが、共同生活しているためにそれも許されません。

純子の容体はますます悪くなり、「※孫悟熱」と診断されました。夕方からせっか

※孫悟熱……満州地方ではやった高熱を伴う病気

く飲んだお乳も喉につかえて呼吸困難になりました。額をさわるとかっかと高熱が波打っているようで、冷たいタオルで冷やしてもすぐに生あたたかくなってしまいます。

次第に夜もふけて、真っ暗で明かりもなく、ときどき、マッチの明かりで顔を見ると、つらさ苦しさをうったえるように悲しい声をふりしぼって泣くのです。その声は、

「お母さん！　苦しいよ、助けて！」

と、いっているようです。

ああ、これほどつらいことがあるのだろうか？　かわれるものならかわってやりたい。

口を脱脂綿でしめらせても、水分を飲みこむこともできません。ただ、はぁはぁというだけなのです。わたしはいったいどうすればいいのかわからず、ただおろおろするばかりでした。

ごめんね　純子

純子はわたしをひとり残して、たったひとりぼっちであの世にいってしまいました。

「ごめんね、ごめんね、ふっくらと太って日本に帰れる日を楽しみにしていたのにね」

どんなに語りかけても、呼んでもさすっても、もう二度と目を開けてはくれませんでした。

わたしは気がくるったよう

に泣きました。冷たくなった純子をだいてほおずりをしましたがこたえてくれません。せめてもう一度、お父さんにだっこしてもらいたかった、それも夢になってしまいました。

その日は、決して忘れることのできない『昭和二十年十一月二十一日』でした。少しでも寒くないように、冷たくなった純子をたくさんの衣類で包みました。そして、かちかちにこおりついた土を一生懸命に力をふりしぼってほり、そこにほうむりました。

その辺りは、遺体が多数うめられていて、狼や野良犬がほり返しては食い散らかしていて、悲しく、いたましいありさまでした。

わたしは、毎日、食べ物を持って純子のお墓参りをしました。

わたしたちの部隊の二十人いた子供たちは、みんな死んでしまいました。いつの時代でも戦争のぎせいになるのは、おさない子供たちなのです。

疲労と絶望の中でついにわたしは、おそろしいチフス※にかかってしまいました。

高熱にうなされて、水が飲みたいという夢ばかり見ていて、四、五日は生死の境をさまよいましたが、幸か不幸か助かることができました。友だちが自分の衣服を売ってお米にかえ、おかゆを食べさせてくれたからです。

昭和二十年も過ぎ、満州北部にも春の訪れといっしょにうれしい帰国の話が届きました。

喜びに胸がおどるようでした。

うれしいことは重なります。ソ連軍が帰国して中国共産党軍と交替したことです。危険も少なくなり、手まねで中共の兵隊と話もできます。わたしも朝市に行ってもち米やあめなどを仕入れてきて、みんなで手分けしてもちをつくって売りました。そして少しずつ生活にゆとりもできて、石けんを買って顔を洗うこともできるようになりました。

わたしは、純子をうめた所をほり起こして、日本人のおじさんにたのんで火葬し

※チフス……伝染病の一種

てもらいました。
めらめらと燃えるほのおの中で、「お母さん！　熱いよ！」と純子が泣いているようでした。
「ごめんね、ごめんね」とわたしは手を合わせました。
「もう、どんなことがあっても純子を離さない。お母さんといっしょに日本に帰ろうね」
わたしは、純子の遺骨をはだ身に着けるように衣服にぬいこみました。
昭和二十一年八月二十五日。待ちに待った帰国の日がやってきました。
わたしは純子といっしょに苦労の連続だった日々と別れを告げ、多くの人々がねむっている墓地にお参りして屋根のない貨車に乗りました。
九月五日、ハルビンに着きました。みんなで食糧を買いに行き、買ってきた食糧を背負って歩き始めました。野原で野宿し寒さにふるえました。
[19]松花江(スンガリ川)を船で渡りました。奉天の駅で、夜中にどろぼうにあい、

持っていたリュックサックを取られました。
純子の思い出の物や、主人の写真、衣類も何もかもなくなり本当に無一文になってしまいました。でも純子はわたしといっしょにいます。衣類にぬいつけた純子のお骨をだいて、わたしは「がんばろう」と自分を励ましました。
九月二十二日、「コロ島」[20]から高鳴る胸をおさえて引揚船に乗りました。
九月二十五日の夕方、遠くに島影が見えてきました。
日本です。父や母の待っている日本です。
みんないっせいに甲板にあがってきます。
「ああ、日本だ、日本が見えた！」
「おおーい、今帰ったよ」
声を張り上げて叫んでいます。感動して泣きだす人もいます。
「純子、帰ったよ。おじいちゃん、おばあちゃんのいる日本だよ」
わたしは、この喜びの日のために歯をくいしばってがんばって生きてきたのです。

故郷に純子のお骨をだいて帰り、みんなに温かくむかえられると思うと夢のような喜びです。

父や母は、「よく元気で帰ってきた」と泣きながら、わたしや純子をきつくきつくだきしめてくれました。

兄弟をうばい、わたしの命よりも大切な純子の命までうばった戦争をわたしは憎みます。

今、わたしは無事帰ってきてくれた主人と共に、故郷の優しさにだかれながら、戦争のおろかさを思います。

何のための戦争だったのでしょう。

消えることのない心の傷あとを、平和を願う心として伝えていきたいと心から思います。

（原作　阿部とし子「純子！」）